地方の民藝

柳宗悦

青空文庫

多少の知識は整ってはいたが、実際何が出て来るかは知る由がなかった。私たちは日本の各地に生い育った民藝品を索めて長い旅を続けた。北は津軽から南は薩州にまで及んだ。もとより古い作物の探索ではない。現に何が作られているかを知るためであった。書物やら土地の人々の話で多少目当を附けることは出来たが、吾々の目的を説くことには難儀を感じた。どの地方の人々も吾々のような客を有ったことがないと見える。また吾々の心を惹くものに留意する人は極めて少いと見える。県の出版物も、陳列所の品物もよい指導にはならなかった。吾々は大概の場合自ら倦まず歩くより仕方がなかった。吾々が怠れば品物の方は決して近附かない。凡ての所が処女地であった。精出して鋤や鍬を容れない限り実はない。

予期したのは城下町であった。旧藩の文化が残ると考えられるからである。封建制度が斃れてこの方、わずか半世紀より過ぎないが、変遷の極めて急激な日本では、早くも失った伝統がどんなに多いことか。時はもう遅過ぎるのである。それでも工藝の技術が一番多く残るのはそれらの町々を措いてはない。城は廃れ、代官の屋敷は傾いても、何か歴史の跡が残る。その跡を辿って現状を見るのが私たちの第一の仕事であった。北に、南に古い城下町は点々と地図に載る。

第二に足を向けたのは物資が集散する田舎の町々である。これは地理が決めてくれる。幾つかの奥地を袖に有つ町や村は、品物が集り、また散る場所である。特に市日でも設ける所があ

れば、なお都合がいい。それらの場所では、その地方でなければないものを数々売る。これには材料の相違や習慣の差違が変化を与える。

この領域では資材を絶えず注意せねばならない。資材あっての工藝である。楮が繁れば、和紙の産地である。麻が畑に見えれば、麻布を予期していい。同じ土焼の破片が数あれば、それで窯が見出せたともいえる。街道をつたって同じ仕事が目に繰り返って映れば、その業に歴史があることが判る。漆器屋、竹籠屋、箪笥屋等、多くは集団して軒を連ねる。京の夷川等いい例である。

それ故町の名を頭に留めていい。大工町、檜物町、金屋町、鍛冶町、鋳物師町、銅町、呉服町、紙屋町、箪笥町、紺屋町等々工藝の町々が歴史を負って至る所に残る。それらは多く吾々を待っている場所と考えていい。城下町にはこの幸が多い。

続いて吾々は町の中でも古い街道筋を選ばねばならない。火災は何より工藝への恐怖である。蔵造りの軒並や萱葺の屋根が揃えば、工藝の品もまた揃う。建物が吾々の足を留める所は、やがて品物にも逢える個所である。旧家は物の歴史や在りかを知るに何よりの手引きである。ここで年老いた人たちの物覚えに尽きぬ感謝を忘れてはならない。

もとより私たちの注意は作る家、売る店のみに働いてはいけない。行きずりに道で逢う人々の身形が大事である。冠る帽、纏う着物、背負う籠、腰の持ち物、それらより活きた手本はない。同じように事情が許すなら、民家の茶の間、その台所を見るに如くはない。そこに優る陳

列の場所はない。私たちはそこでその地方の活きたものと話し合える。

店にも色々あるが、地方の特色を一番手近に察知するのに是非とも寄らねばならない場所がある。いつでも店の格で一番下積みにせられる荒物屋である。ここは吾々には匿れた倉庫である。特に町の街道がやがて終る辺りには、在方の人々が寄る荒物屋が一、二軒必ずあるものである。山間や奥地の村々で日常使う品物が一と通揃えてある。地方を知ることと荒物屋を知ることとはしばしば同じ意味さえある。

田舎の人たちは習慣に篤い。今は変りめではあるが、それでもしばしば驚くほどの保存において生活の様式が残る。私たちは必ずしも過去に歴史を探らずともよい。現に今使われている数々の品物で歴史を読むことが出来る。奥地への旅はこの興味をそそる。その場面の縮図が荒物屋に展観せられる。互に似ているようでいて、荒物ばかりは地方の独立を乱さない。

地方で出来る品物はその分布の区域が案外に狭い。名を得て遠く出るものもある。だがしばしば遠出すれば、地方の性質を忘れがちになってしまう。私たちはある村で、見たこともない品物に逢う。だが買い忘れたら隣村で得られるといつも予期してはいけない。近い二つの村はしばしば品物において縁がないかの如くに並んでいる。それほど一区域に分布が限られる場合がある。民藝は時々極度に区分的な発達をする。

興味深い一つの現象は、ある種の工藝が特にある場所でのみ栄えることである。鹿沼の箒、丸亀の団扇、天童の将棋駒、久留米の絣、結城の紬、土州の金物、それぞれに面白い発達であ

る。そういう場所からはとりわけ生産の組織に付て多くを学ぶことが出来る。その考察は未来の民藝に取って重要な示唆を投げる。

旅を終えて振り回ると、今なお続く民藝の分布に付て色々の結果を捕えることが出来る。固有の工藝が多く残るのは概して北方に多く、南国に浅い。もっとも焼物の如きものを寒国に予期するのは無理である。摂理は運命をうまく御して行く。雪に閉じ籠められる、陰惨な、退屈な、長い冬の日が、人々を工藝へ誘った一つの動因である。雪と手工藝とは因縁が濃い。暖国は作るよりもむしろ商うのに多忙である。南国は移動するが、北国は停止する。それだけに生活の様式が今も昔とそう変らない。変らないだけに品物は正直であり、純朴である。純朴なものは間違いが少い。各地で拾い上げたものを省ると、ほとんど皆昔との繋がりを有つものだけである。新しく工夫せられたもので美しいものは悲しいかな極めて少い。いわば伝統を背負うものの方が、いつも美しさで優る。地方の生活から湧き出た純日本のものには勝ちみが多い。それには背後に充分な準備が仕度せられているからである。自然と歴史と生活との綜和がそれらのものの根柢に潜む。都会から田舎へと洪水のように流れ込む商業的な品物には、そんな背景がない。正しい品物がそれらのものの中に見附からないのも無理はない。

私たちは幸にも各地から多かれ少かれ品物を拾いあげることが出来た。だが数で表わせば、それらを取り囲む無数の品物に対して、真に些少な歩合を占めるに過ぎない。この旅は私たちに辛棒強い努力を要した。それは砂中に黄金を捜す倦怠な仕事とさしたる変りはない。それほ

ど地方の民藝は深く匿れて姿を現さない。そのあるものは、否、多くのものは既に失われてしまったといえよう。それだけに吾々は仕事を急がねばならない。伝統が廃れ、早く手工藝の多くが亡びた西洋に比べれば、まだまだ余裕のある事情に在ると想える。私たちはこのことを恵みとして、活かして考えたい。手工藝をただ過ぎ行くものとして捨てる人もあるが、余り粗野な見方と思える。日本の工藝はまだ温いのである。多くは家庭の手仕事として生れている。

もとより拾い上げた幾多の作物を眺めて、その中に昔とは劣る色々な性質を気附くことが出来る。中で一番著しいのは、模様の喪失である。日本は刺繍に、漆器に、陶器にあれほど優れた模様を有っていた国である。それも五十年と溯れば沢山である。だがこの間に日本人は模様への能を速かに失ってしまった。今でも器物の上に無数の模様を描くことに変りはない。ただ正しい意味での模様だけは描けなくなってしまったのである。このことは一抹の淋しさを吾々に抱かしめる。事情が変ればこんなはずはない。

だがこれらの引けめがあるにかかわらず、作物に正しさを求めて捜せば、何よりも地方の民藝が吾々の前に呼ばれて来る。それらはまだ用に忠実な仕事をしているからである。利のためには凡てを犠牲にすることを厭わない都市の工場からは、決して正しい品を期待することが出来ない。地方の民藝を訪ねるのは、正しい工藝を探る意味がある。しかも日本の品と公に呼べるものは、それらを措いてどこにあろうか。そこには借り物がない。日本で咀嚼し、日本で産んだ工藝である。民藝で今も日本を語れるのは日本人の特権である。それらはともかく地から

生れた工藝である、その意味で最も正当な工藝の性質を示すといっていい。

今までこれらのものの存在を見棄てたのは自覚の不足に依る。どの公な物産陳列所も、申し合せでもしたかのようにその地方の固有のものを陳べない。そうして都風を摸したものを目指している。どの陳列所もそれゆえ郷土の特色には乏しい。東に行くも、西に行くも陳列所は一列に同じである。今は凡ての品が都の工場から地方へ流れ込む時期である。地方ではそれを「下り物」と呼ぶ。店という店、もう九割はそれで埋る。かつて都を指して上った地方の品々は、その逆流に手向うことが出来ない。特色ある各地の伝統と技術とは無数の優れた職人と共に斃れつつあるのである。これに勝る無駄があろうか。

しかしこのことが何を意味するかを地方の人たちは充分に自覚しない。各地で傭う技師は驚くほど地方の工藝に付ては冷淡である。そんなものを考慮するほど野暮なことはないと考えてしまう。私たちとここで考えが別れる。何故その土地に与えられた材料と手法とを活かして進まないのか。それより健実な進み方があろうか。地方の工藝のみが工藝ではない。しかしその喪失は工藝の重要な部門の喪失を意味する。

私たちに取っては姿の新しさ古さは、さして難儀な問題ではない。それよりも物が正しいか正しくないか、誠であるか誠でないか、この方が一義となる問題である。このことを求めて追えば、如何に地から生れ出た郷土のものに、工藝として正しいものがあるかに気附くであろう。都会の工場から生れるものには偽瞞が如何に多いことか。ほとんど皆商業主義の犠牲に過ぎな

い。その裏には悲惨な労働の苦痛が読める。そこに物の正しさを求めても無理であろう。私たちは自然と生活とに即して発した民藝から多分に工藝の律を学ぶ。都市が地方を害うべきではなく、地方が都市を救わねばならぬ。生活の変化はやがて民藝の外形を変えるであろう。当然そうあっていいのである。ただ変らないのは美の法則である。姿は変っても、民藝に潜む美に古今はない。

終りに読者に告げる。史的に見てこれらの蒐集品は、何か将来の研究者に役立つであろう。だが物を集め調べるそのことに私たちの意向の中心が在ったのではない。正しい作物を求め、そこに流れる美の律を省み、それをどう来るべき生活に活かすかが本旨である。それ故これらの品物を見て悦んでくれる人があるなら嬉しい。進んでそれを生活に取り容れて使ってくれる人があるならなお嬉しい。しかしそれよりも更にこれらのものを通して、未来に正しい作物を産んでくれる人が出るなら、最大の感謝である。業を失った多くの農村の職人たちは、よき指導者を待ちあぐんでいる。為すべき仕事は多い。それらのことを念じて序の言葉を結びたい。

昭和九年十月二十三日

柳宗悦

青空文庫情報

底本：「柳宗悦　民藝紀行」岩波文庫、岩波書店
　1986（昭和61）年10月16日第1刷発行
　2012（平成24）年6月15日第9刷発行
底本の親本：「柳宗悦全集著作篇第十一巻」筑摩書房
　1981（昭和56）年12月5日初版発行
初出：「工藝　第四十七号」
　1934（昭和9）年11月14日発行
入力：門田裕志
校正：砂場清隆
2019年4月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

地方の民藝

柳宗悦

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/